



木の葉のベンチ (由布市・アトリエときデザイン研究所)

その後交通の要所として町は発展。仙台都市圏への製品の浸透を図るため、仙台市内にアンテナショップも設置しました。

重ね切りの板を張り合わせた木の葉のベンチ
(由布市・アトリエときデザイン研究所)

2016(平成28)年の熊本地震で、隣県の観光地である湯布院も大きな被害を受けました。しかし、住民の復興への努力の甲斐あって、その2年後の春には、町の新たなシンボルとして観光案内所が駅前オープンすることになったのです。

「由布市ツーリストインフォメーションセンター(愛称YUFU INFO/ゆふいんぷお)」と名付けられたその建物は、建築家・坂茂さんのデザイン。エントランスから内部へと続く木材を使った木を思わせる形状の大きな柱と、そこから枝が伸びたように続いている



矢羽根模様の集成材「ツヤマボード」でつくった整理箱 (宮城県津山町 現・登米市)
スギを丁寧に矢羽根模様風に継ぎ合わせてある矢羽根集成材は、使用した木材の色みの組み合わせ方で、さまざまな表情を見せる。それをプレポリマー(産業用木固め剤)で加工することで、食器などの製作もできるようになった。現在、クラフトショップ「もくもくハウス」では、この集成材を使った四角い「おべんとう箱」が大人気だという

が低いのが悩みでした。

この木目の荒いスギの付加価値を高めるために、1982(昭和57)年に私が考えたのが、スギの間伐材を利用した矢羽根集成材を加工し、工芸的な素材をつくること。これをもとに「何でもつくれる箱産業のまち」づくりを行なおうと提案しました。

この矢羽根集成材を、津山町は「ツヤマボード」と名付け、日常の工芸的生活用品や玩具、家具の生産から建材まで、木工品の加工生産と素材市場整備を一体となって進めました。

間伐材を利用して建てたシンボル建築「もくもくランド」は、その中にクラフト商品の展示販売施設である「もくもくハウス」、郷土料理を提供するレストラン、竹の加工などを行なう施設、農産物の販売施設、郷土文化の展示や保存を行なう伝習館などがそろったもの。この施設は地域材の津山杉を軸とした地域文化の発信基地となっています。

地域素材を生かす

リュウキュウマツでつくる 「ミーフギチャダイ」(沖縄県石垣市)

沖縄の南・石垣島文化センター(当時)の依頼で、戦後途絶えたギリギリ(木工ろくろ)の復活を手伝ったのが私と沖縄の人たちとの長い交流の始まりで、1981(昭和56)年、44歳のときでした。

当初初めて目にした、石垣市民の暮らしに息づく穴の開いた茶托「ミーフギチャダイ」には驚きました。鎌倉時代、禅僧によって中国から日本に持ち込まれたとされる、天目茶碗をのせる天目台に似ていて、ここは大陸文化の通り道なのだと思感させられたものです。

私はその後、2015〜2018(平成27〜30)年まで、沖縄本島の最北端・国頭村の「ヤンバルクラフト作

り手養成塾」に指導に通い、現在も沖縄とは深い交流が続いています。

国頭村は、飛べない鳥「ヤンバルクイナ」の保護区であり、日本で33番目に国立公園に指定された「やんばる国立公園」の一部を占める自然豊かな土地柄。この公園は沖縄の固有種動物の宝庫で、ユネスコの世界自然遺産の登録候補地にもあげられています。

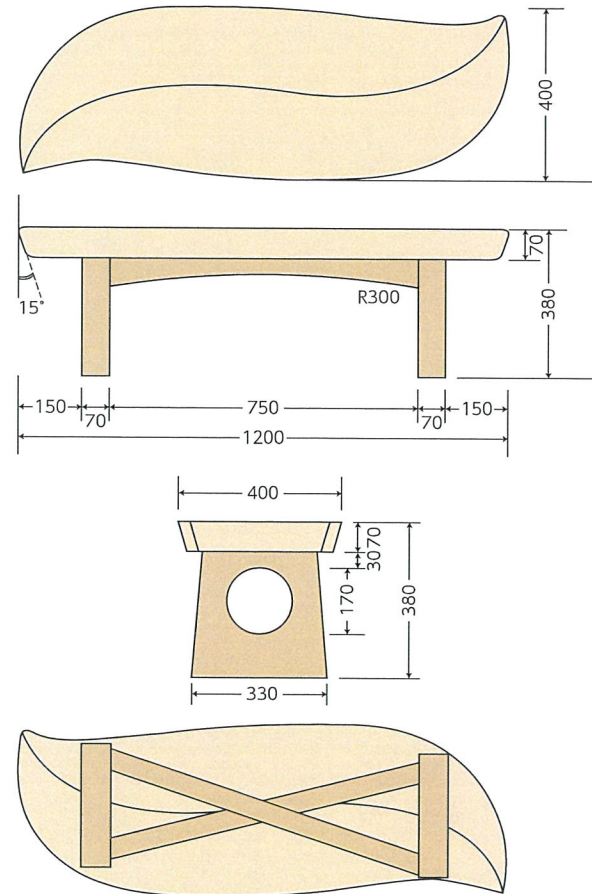
この地に育つ沖縄固有のリュウキュウマツは、日本列島のマツの中で最も強靱で美しいもの。北海道のアカマツ、トドマツの材は白くやわらかく、東北のナンブアカマツ、ヒメコマツはヤニが多く、関東で喜ばれ全国の海岸の防砂林として使われているクロマツは、材は白く照りがあります。九州一円のマツは、昭和から平成にかけて松食い虫の被害ではほぼ全滅し、被害は全国に広がりました。

天井とが、見る人に森を想像させます。私はその屋内空間にふさわしい、落ち葉の形のベンチをつくりました。このベンチには建物の品格に合わせつつ、子どもたちに愛されるローカル

性もぜひ取り入れたい。そして観光客が旅の疲れを癒して、滞在の印象が忘れないものとなるような良質なものでなくてはなりません。こうした私の思いを実現させるには、新しい発想と

伝統技術の革新的応用が役立ちました。こんなベンチが、街角にもひとつひとつ置いてあれば楽しいと思います。

木の葉のベンチ図



大分県産のスギの間伐材を使用し、クヌギの葉をイメージして製作したベンチ。重ね切りの技法でつくった集成材の作品としては異例の厚みがある。プレポリマーPS木固め剤で加工してあるので、掃除も容易だ。「湯布院 玉の湯」の湯の坪街道沿いポケットパークにも設置されている



リュウキュウマツの食器 (沖縄県石垣市)



ミーフギチャダイ (沖縄県石垣市)

- ①エンジュ
- ②キハダ
- ③カシ
- ④ウメ
- ⑤ヨコクラノキ
- ⑥ヤマグルマ
- ⑦ヤマザクラ
- ⑧ヤマカシ
- ⑨トネリコ
- ⑩アオハダ



いろいろな樹種からつくった椀
(島根県匹見町)
素材の異なる木の椀がずらりと並び、その色や木目の多様さ、手に取ったときの重さの違いにどれもが驚く。一本一本の木の個性が引き出された木工の一例だ

海岸沿いのクロマツで食器づくり

(茨城県大洋村 現・鉾田市)

茨城県大洋村(現・鉾田市)は、太平洋に面したクロマツの海岸線が続く海沿いの村。この地で、2004(平成16)年から相内義雄さんを中心に、器づくりの研修が始まりました。その舞台は、スポーツ予防医学を使っての村民の健康づくり推進で知ら

—そんな中で、沖縄のリユウキユウマツは毎年の台風をものともせず強靱。透明感のあるアメ色の、明るい雰囲気を持つ器がつけれます。
2019(平成31)年1月に開園した村立くにがみこども園の給食器は、「ヤンバルクラフト作り手養成塾」での2年間の研修を終えた山川安雄さんたち、「やんばるクラフト生産普及組合」のメンバーの手づくり。「やんばるの木材資源を100倍の価値に高め」を合言葉にしています。



大洋村のクロマツによるお盆
(茨城県大洋村 現・鉾田市)

れる石津政夫村長(当時)が、クロマツの木での食器づくりを将来の新たな産業に育てようと、農産物直売所に併設した木工房です。

クロマツは樹皮は黒いが木質は純白で光沢があり、関東の人々には祝いの樹として尊ばれています。この木工房から生まれた食器も、地元で獲れるハマグリやヒラメなどの新鮮な魚料理に格別な器として喜ばれました。

木図鑑を片手に森に入り、100種類の樹種を確認し、100種の木で椀をつくらせて、器にならぬ木はないことを体験したのです。

「100種類の木の椀」と名付けられたそれらの器は、一つひとつ色が違い、香りが違い、樹木の花が咲いたように華やかです。100とは「たくさん」、つまり豊かなという意味でした。

町のピンチから生まれた鶯沢のあかり
(宮城県鶯沢町 現・栗原市)

平和な山村の小さな地域は、時に天災・火災・経済情勢などの深刻な危機にさらされます。

宮城県の北、鶯沢町(現・栗原市)は、鉛鉱山で栄えた町でした。

1985(昭和60)年、三井鉱業細倉鉱山が閉山、廃坑となり、町があかりが消えたように寂しくなったころ、私に町の再生の相談が持ち込まれました。それを受けて現地に赴いた私は、

150の樹種からなる広葉樹林を生かした「100種類の木の椀」
(島根県匹見町 現・益田市匹見町)

日本中のどの農山村にも、60〜80種の樹木があるといわれています。温帯系と寒帯系が出合う島根県匹見町は、町の90%が森林で、なんと150種類もの広葉樹があります。

1980年代にこの地に指導に招かれた秋岡芳夫さんは、これまでのようなバルブ材として切って売られるだけの採取型林業を第一林業と位置づけ、スギやヒノキといった針葉樹だけしか育林しないのを第二林業としました。そしてこれから必要な林業は、木の加工技術を持ち、森林を育てながら自然を減らさない、森との共存型林業だとして、第三林業へ取り組むことを説きました。秋岡さんの話に共鳴した地元の人々は1984(昭和59)年に第三林業開発グループを結成。代表の大谷信一さんやメンバーの大谷照行さんたちは樹

新しいまちづくりのグループの核となる佐々木強さんと、地域デザインのストーリーを練ることから作業を始めたのです。

地域はそれぞれ固有の風土と固有の歴史と固有の文化を持っているのだから、そこには必ず固有の価値があるはず。どんな歴史とどんな暮らしと、どんな問題を抱えているのか、どんなまちづくりを進めていくのか、地域デザインのストーリーを練って、そこから地元の木材を使った具体的なものづくりへと移っていかなければなりません。

鶯沢町の場合は町の主要産業であった鉱山が閉山したために経済的基盤が崩れ、町民の多くが町を離れつつある非常に深刻な事態に直面していました。そこで、まず細倉鉱山の鉛と町との関わりを考えてみました。

その結果わかったことは、鉱山は町にあったものの、鉛はあくまで鉱山の堀の中のものだったということ。町の



ツバキの器 (長崎県上五島町)

は、5つの島を中心に大小140あまりの島々が西海国立公園に指定されています。上五島町には686万本の天然ヤブツバキの自生林があり、毎年一万本が増殖されていて、その実から椿油が生産されて町の特産品となっているのです。

こうした信徒たちの思いと、弾圧、迫害の歴史、点在する大小53の教会に対して2018(平成30)年、ユネスコの世界文化遺産への登録がかなったのです。

成長の遅いツバキの木はその分、堅くて丈夫な木に育ちます。地元で木製品の工房を営む犬塚忠生さんが育てた「新上五島町椿木工技術振興会」は、若手女性起業家の川口伝恵さんを旗手にメンバーは30名をこえ、「つばき木工房」でヤブツバキの木をはじめ島のさまざまな木を使ったすぐれた生活用品をつくり、日本丸などの大型客船も寄港する港の朝市では、観光客に人気の商品になっています。

水源林のスギ丸太でつくる水紋皿

(東京都奥多摩町)

首都・東京にも山村があります。東京の奥座敷・奥多摩町は町の94%が森で、1億8900万tの水を溜める奥



水紋皿 (東京都奥多摩町)

多摩湖のある、水源の町です。

この地で林業家の原島昭和さんは、長年にわたり広大な水源涵養林を守ってきました。それだけでなく、息子の啓さんとともに、年間200万人の観光客を集める東京都民の憩いの地・高尾山から青梅街道沿いの周遊路を「木の街道」とする構想を進めたほか、山村クラフトで学校給食器から日常の生活用具までをつくって、「木の家」と

人の生活と鉛が直接関わることはなかったのです。ですから鉛を塀の中から連れ出し、鶯沢町の人たちの生活の中でとらえ直してみました。

鉛の採掘は、かつてはカンテラ、そしてガス灯、それから電気とあかりに頼らなければできませんでした。鉱山の灯が消えても、鶯沢の灯が消えるなんてあり得ません。そこで自分たちの生活を支えてきた灯をもう一度見直し、町の本来のあり方を照らし出してみよ

うというテーマでつくったのが、インテリア用の電気スタンドです。

電気スタンドとしては丈長で、ほっそりしたフォルムの本体ながら、木をうまく組み合わせることによって倒れにくい照明器具が生まれました。これは通産省の電気器具認定を受け、一般家庭やホテル向けとして商品化されました。そしてこれらの照明器具は、鶯沢の町の人にとっては単なるモノにとどまらない固有の意味を持つ「かた



ランプスタンド (宮城県鶯沢町 現・栗原市)
インテリア性の高い洗練されたデザインの電気スタンド。鶯沢町の木を素材として使い、うまく組み合わせることによって安定性を高めるとともに、この町ならではのストーリーを秘めた製品となった

ち」になったのです。

鶯沢町ではこのほかにセラテープスタンド、ペーパーウェイト、小さな花立てなどもつくられました。たとえば調理道具や食器は、風土の反映である郷土料理に伝えようと、試行錯誤の中で物の形を変え、やがてその地域固有の形に完成されていきます。言うなれば、その地域らしい暮らしのいないところにはその地域らしい形はないのです。だれのために、そして何のためにつくるのかということを問うことが、工芸における形探しの出発点ではないでしょうか。

観光地・湯布院の温泉旅館でも、鶯沢のあかりはやさしいともし火となって宿泊客を癒しています。

島の天然ヤブツバキでつくる生活木製品

(長崎県上五島町 現・新上五島町)

長崎市の西方100キロの五島列島